

カワウの個体群管理の考え方

NPO法人バードリサーチ

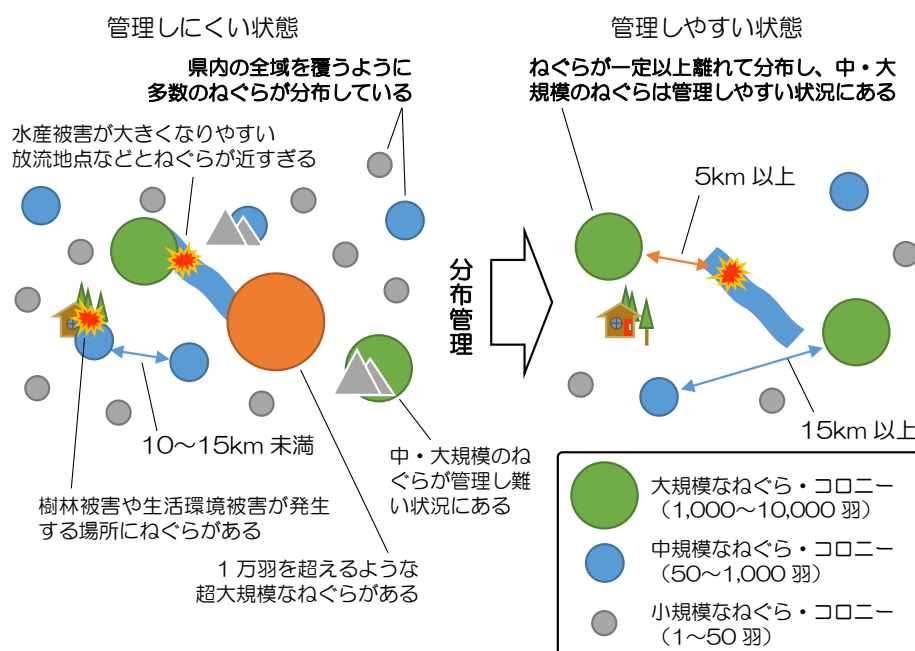
高木憲太郎

野生鳥獣の管理は、シカなどの獣類を対象としたものが中心となって進められてきました。そのため、捕獲に頼った管理が主流であり、この考え方が基礎となっています。カワウの管理においても、個体数調整は重要な役割を担います。しかし、カワウの管理が個体数調整だけで済むことは、まず、ありません。防除対策が実施されていないければ、いくらカワウを殺しても、繁殖や地域外からの移入によってその効果は薄まってしまいます。個体数の少ないねぐらやコロニーがあちこちに点在している状態では、捕獲効率が低く、費用対効果が悪くなってしまいます。また、個体数調整を実施すれば、その攪乱によって一部のカワウがコロニーを離れ、周辺の管理しにくい場所に新しいコロニーを形成するかもしれません。

したがって、カワウの個体群管理を効果的に進めるためには、モニタリング調査や被害状況についての現状把握を行い、いつ、どこで、どのような対策をするべきか、不測の事態が起きた場合の対応はどのようにするのか、計画を立てておく必要があります。

カワウの個体群管理には、個体数調整だけでなく、ねぐらやコロニーの分布を管理する「分布管理」も重要な役割を担います。計画に基づいて、管理しやすい状態にねぐらやコロニーの分布を維持することができれば、個体数調整の効率を高めることができますし、個体数調整ができなくても分布管理によって被害を軽減できる場合もあります。

具体的な個体群管理の手法や事例については、他の講義で詳しく説明がありますが、この講義では、個体群管理を実施していくために、カワウのねぐらやコロニーの分布をどのように誘導していくのが良いか説明するとともに、モニタリング調査の意義、管理計画の重要性、管理を実施していく体制の必要性についてお話しします。



※注)
ねぐらやコロニーの個体数の規模感を目安であり、(全体の生息数、被害の状況、これまでの経緯、河川湖沼の許容力、ねぐらの立地が沿岸部か内陸部かなど) 地域の状況によって異なります。